

# 共生社会を支える教養教育の可能性 I

-パフォーマンス・ラーニングを導入する-

大橋 眞

OHASHI Makoto

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部

Gehrtz 三隅 友子

GEHRTZ-MISUMI Tomoko

徳島大学国際センター

**要旨**：2011年度後期より現在（2014年度後期）まで徳島大学共通教育の「日本事情 I・II（留学生対象科目）」と「異文化交流から学ぶグローバル化（前期）/異文化交流の体験から何を学ぶのか（後期）」の二つの授業を教師の連携によって実施している。教師の協働から留学生と日本人学生（社会人も含む）の協同学習を考え、大学という教育機関でのこのような取組みの必要性を「交流と対話を通じた学内の連携を考える（2012）」にて考察した。活動を続ける上で、学生の協同学習及び主体的に取り組むというアクティブラーニングを模索しながら、2013年度後期からは演劇的アプローチを取り入れ、すなわちこれまでのスピーチによるプレゼンテーション活動に加えて最終課題を聴衆に向けて発表するパフォーマンス型の活動を取り入れた。インプロヴィゼーションによる準備活動から最終課題にいたるまでの経緯とともにパフォーマンス・ラーニングを軸とした新たな教養教育の可能性を考えるものである。（本稿は2014年度前期の内容を対象とする。）

**キーワード**：アクティブラーニング、パフォーマンス・ラーニング、プロジェクトワーク、演劇的知、多文化共生

## 1. はじめに

筆者らは、2012年に「交流と対話を通じた学内の連携を考える-『異文化交流の体験から何を学ぶのか』と『日本事情IV』の連携-」（注1）において、大学内の教師の協働による協同学習がもたらす教育的意義を明らかにした。留学生と日本人学生が共に学ぶ場を作ること、そして教員の教育に対するそれぞれの価値観のすり合わせから、さらに具体的な活動にしていくことの難しさとおもしろさを述べた。また与えられた課題を留学生と日本人学生が協力して達成する過程で、一人の日本人学生が述べたように、まず「自らの授業への関わり方のこれまでとの違いに気づいたこと」、さらにこの授業に参加する中で、「自分から挑戦しないとチャンスも収穫もない」とし「自分から意欲的に学びたい」という気づきと関わり方の違い、言い換えればこの学生にとって主体的に学ぶことすなわちアクティブラーニングへと向かったことがわかる。さらに現在も継続して、改善を加えながらその有効性を考察している。筆者の三隅は協働する教師の一人として、また日本語教師として留学生を対象とした日本語教育の側面からこの連携に関わってきた。課題を通して日本人学生の学びに対しても大きく関わっていることをさらに実感している。本稿では、留学生への日本語教育を概観し、さらに日本語教育の視点から提案した学習課題を日本人学生がどのように達成していくのか、またそこから

何を学ぶのかを考察する。

## 2. 国内の日本語教育

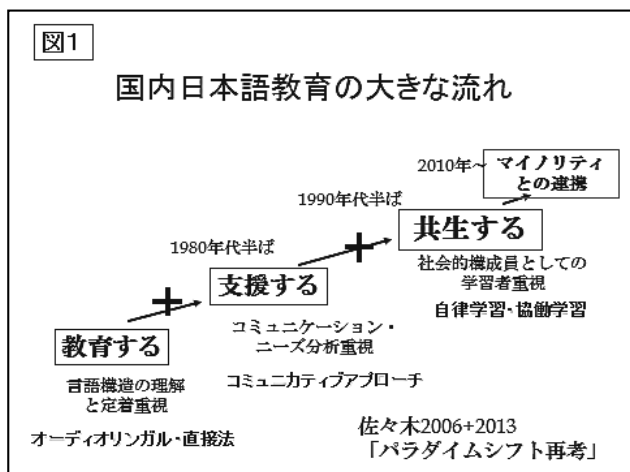
### 2.1. 留学生の日本語

大学で学ぶ留学生の日本語レベルは全くの未習から、日本語能力試験 N1（注2）取得者さらには日本人とかわらないくらいの超絶まで様々である。学部留学生には、日本人学生の外国語にあたる「日本語」及び「日本事情（日本語学習を支える文化や習慣の学習）」の授業が開講されている。「日本語」は日本語のスキル（例えば読む・聞く・話す・書くといった技能、あるいはその総合的な能力）をレベルとニーズに応じて伸ばすことが、一方「日本事情」は、日本語そのものを学習するというよりは、日本社会で生きるために必要な日本文化や習慣の知識を得ることが目標となっている。すなわち大学で学ぶ留学生は、日本語そのものの知識とその運用そして運用に必要な文化や習慣の知識を学ぶ機会が与えられている。また、学部留学生あるいは協定大学からの交換留学生は日本語能力試験 N2（日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる）以上のレベルの学習者が想定されている。大学入学前に日本国内で日本語を学習した留学生は能力試験といった評価だけでなく、レベルや能力の把握が容易だが、交換留学生や研究生の場合は学習者のレベルやニーズがまちまちで、日本語教

師が最初に準備したコースデザインが実施できないことも起こっている。また海外で日本語を学習した者の多くは、教室内で「日本語」を学び、メディアやインターネットからの情報や、アニメ等のサブカルチャーから「日本事情」の知識を得ているのが現状であろう。「日本事情」の授業には、前述の学部入学と交換留学生の二つのレベルとタイプの学生が混在している（注3）。

## 2.2. 国内の日本語教育の流れ

ここから広く国内の日本語教育の流れに視点を移す。日本国内で日本語を学ぶ人へのアプローチにはこれまでにいくつかのパラダイムシフトがあった。大学を取り巻く環境として概観すると、歴史的にはかなり長い間、効率よく習得してもらうために「教育する」という時期が、1990年代には、より使えるように「支援する」、そして社会の構成メンバーとして「共生する」、2010年からはさらに「マイノリティとの連携」という流れがある。この四つは独立しているのではなく、下から上へプラスの記号で表されるように加えられているのが特徴である。そしてそれぞれの学習観に即した教授法も開発された。「教育」では「オーディオリンガル」、「支援」では「コミュニケーション・ニーズ分析重視」「共生」では「自律学習・協働学習」があげられる。2010年代の今は、より細分化した様々な学習者（例えば身体に障害を持つ、あるいは学習そのものが困難といったこれまでとは違った教育や学習の方法が必要な人たち）に対する日本語教育のあり方を考えるとともに、基本的には一緒に社会を構成していくすなわち「共生する」ための方法と内容が考えられてきている。ここで、学習者が日本人と協同で学び、かつ自律的に学習を進める方法として「プロジェクトワーク」が日本語教育の機関で改めてその有効性が認められ実施されるようになった。



例えば、ある授業で、日本文化や習慣に焦点を当てた実際の活動（タスク）を日本語で日本人と行い、まず留学生自身が今の自分に足りない日本語力や知識に気づき（意識化する）、そこで共同作業者（教師・日本人）の助けを借りながら最終課題（生産物：プロダクト）を達成するというのが、「プロジェクトワーク」である。教師は「教える」、「支援する」に加えて「共生する」ための場を作る必要がある。このプロジェクトワークを留学生が体験することによって、これからの生活を支える日本語を自律的に学ぶストラテジーをつかむことと、各自が日本で学ぶ意義を明確することにつながるとする。

## 2.3. プロジェクトワークの特徴

表1の3つの特徴に表されるように、教室と現実の生活をつなぐ活動を通して、学習者は日本人と協力して自ら課題を遂行する。その中ではお互いの価値観の違いが明らかになり、修正をしながら折り合いをつけていくこ

表1 プロジェクトワークの特徴

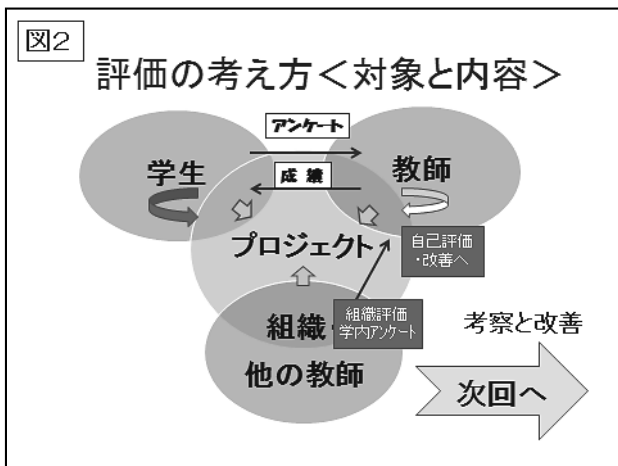
- 1) 活動
  - ①教室と現実の言語活動を結びつける
  - ②学習者がより主体的になる **活動**
  - ③異文化接触の体験の中で考える
- 2) リソースの組み合わせ  
・物的 ・人的 ・社会的
- 3) 教師の働きかけ⇒コンサルティング

とが必要となる。そして、学習のためのリソースとして、物的・人的・社会的な素材が組み合わせられて使われる。徳島大学にて筆者が実施している「美術館で日本語を鍛えようプロジェクト」では、例えば美術館が社会的、学芸員が人的、美術作品が物的といったリソースとなって、学習者が一番好きな作品を選んでその理由を発表する、あるいは印象的な作品の前で感じたこと思ったことを即興でミニドラマにするという活動（タスク）を行う。一方、教師は美術館訪問への日程を調整し、学芸員とタスクのための空間と時間を準備する作業を行い、何よりもこの活動への動機付けを行う。教師の役割を言い換えれば、①タスク目標を設定する⇒②学習者のレベルに合わせて学習活動を設定する⇒③教室外の世界に関する情報を提供する⇒④現実社会でコミュニケーションに必要な言語の確認をす

る⇒⑤モニターとフィードバックをすることになる。

また最終プロダクツの形も、成果発表型（学習した内容をまとめて広く配布できるようにパンフやフォトブックの作成、プレゼンテーションやドラマ発表等のパフォーマンス）、調査型（日本語話者へのインタビューやアンケートによる社会調査等）、共同作業型（教師、日本人との共同作業を中心にする）、また必ず日本人の参加を基本とする日本人参加型プロジェクトワークもある。もちろんこれらの混合型も考えられる。

さらに評価に関しても従来の方法とは考え方が異なる。教育活動の前後の学習者の状態を比べて、その伸びや変化をみて成績を出すという評価に加えて、最終プロダクツに関わった全員が評価することは当然だが、プロジェクトワークでは活動に関わった者すべてが自らをそして他者を評価することが行われる。これら複数の視点からの評価によって、吟味、検討がなされ、次回のプロジェクトの改善へとつながる循環型評価であることも特徴である。



### 3. 留学生から広く日本人学生への学びへ

#### 3.1. 日本人学生の学び

日本語教育の立場から以上のようにプロジェクトワークを見たが、実はこの方法は一般に教育学では、プロジェクトに基づく学習 Project-Based Learning=PBL として行われている。具体的な学習課題（プロジェクト）に対して、学習者が中心となって反省的的反復作業をしながら、プロジェクトを完遂させる方法である。様々な言語を母語とする学習者のいる授業の中でプロジェクトワークを行う際に、日本人の参加を基本とすれば、まず日本語を話すことが強いられる。そして、日本人学生が留学生（日本語学習者）のモデルとなり、教師として

ではなく「共生する」メンバーとして、日本語を教える、支援することが可能になる。すなわち学習のための人的リソースとなりうる。また一方では、日本人側の学習としてとらえることができよう。日常で当たり前のように使っている日本語が、留学生にとっては大変難しいものであること、情報を共有するために英語に置き換える、漢字で書いてみる、漢語を優しい日本語で言い換える、または実物を見せたり、身体で表現したりという日本人同士では考えられない様々なコミュニケーションの取り方を強いられることになる。そして共通の理解のもとに、課題を達成するための話し合いこそが価値観のすり合わせとなり、まさに「協同学習」の実践である。この協働実践を通して、留学生を越えて日本人学生の学びに焦点をあてるきっかけとなった次第である。日本人学生の問題としては、高校までの学習と違った様々な学び方を体験する必要のあること、これまで培った「知識」を柔軟な臨機応変に役立つ「知恵」に変える必要があることも明確になった。さらにぼんやりとした意識で大学へ入った何人かの日本人学生にとっては、外国へ来て学ぼうとする留学生の前向きな態度が自らの意義を見つけるヒントになることも多かったと考えられる。

#### 3.2. 現状を取り巻く問題解決に向けて

一方でプロジェクトワークを遂行する中で問題になるのは、留学生の日本語のレベル差が大きいときである。学部留学生は一定のレベルに達しているが、多くは試験のための学習に重きがかかっていて実際の運用能力は弱く、また交換留学生や研究生にいたってはどちらの力も足りないこともある。そして日本語の試験の成績とは別に、コミュニケーション能力の高い学生がいるのも事実である。文法力、語彙力の低さを多くは身体的コミュニケーションを駆使して課題を達成する姿も多く見られる。日本人も非言語コミュニケーション（表情、ジェスチャー、姿勢、声のトーン等）が会話の重要点であることとその有効性を知っている。がしかし文化差による非言語コミュニケーションの違いがミスコミュニケーションのつながることや、自らの非言語コミュニケーションの特徴はつかめていないのも現実である。留学生、日本人ともに、さらに日本語の非言語コミュニケーションの能力を獲得するための具体的な方策が一つの課題といえるのだろう。非言語コミュニケーション能力の習得の方法として、ドラマ等の映像作品を活用した日本語教育も行ってきている（注4）。がしかし、やはりその動作

を見て理解するという知識の学習にとどまってしまうが、視聴からロールプレイ等の実際の場面に合わせて、身体を動かし声を出してやってみて初めて獲得できるということも確認している。

こうしてこれまで日本人参加型プロジェクトワークを実施してきた経験から、自らの身体を意識し、声とことばを使いながら互いの関わりを見直す演劇的要素を授業に取り入れることできないかと模索し続けた。こうして課題を通して「日本語によるコミュニケーション」を体験的に全身で学ぶことが留学生、そして日本人学生にも可能になると考えた。

実際には2014年2月に留学生を中心とした演劇活動に、日本人学生の参加をよびかけて実施した(注5)。「日本事情Ⅱ」受講の留学生11名と「異文化交流の体験から何を学ぶのか」の日本人学生30名のうち5名が実際に舞台上で演劇活動をし、25名が劇場で演劇及び交流会の手伝いをした。この経験をもとに、学外の劇場での観客に対するシアター活動でなく、学内の授業でお互いの発表活動を作り、かつ互いに見合うというドラマ活動を取り入れることになった。

#### 4. 演劇的知を取り入れるために

##### 4.1. 獲得型授業

言語(日本語)教育では、コミュニケーションアプローチとして、これから自分が学習言語で遭遇する立場を想定して言語の機能を練習するといったロールプレイ・シミュレーション・アフレコ・朗読・スピーチ・プレゼンテーション等の演劇的手法を使うことは常に行われている。表現のための3つのモード、ことば(文字・声)、身体(表情・振る舞い・態度)、もの(ホワイトボード、ポスター、コンピューター、衣装等の道具)を使った方法である。一方広く学校教育の立場からは、渡部(注6)らが知識注入型の授業の対概念として演劇的知を活用した獲得型授業を提唱している。獲得型からは学習者は「自律的学習者」にそして様々な表現活動(アクティビティ)に取り組むことを通して、知識ではなく「知恵」を形成しようという。演劇活動が生み出すこの「知恵」を「知識の構造や認識の仕方、身体への気づきや学びの作法の総体」と定義している。さらに演劇的知は①学習内容(対象)に関わる知識:知識の量ではなく質を重視し、記憶による断片的知識ではなく身体活動を通じた知識であること、②学びの体験:共同的な学びとして、一つのタスクを達成し自己も他者も大切な構成員であることを

自覚すること、③学びの作法:前述の三つの表現モード、ことば・身体・ものを活用するとともに、対人コミュニケーションの作法というスキルを手に入れること、④自己(存在)への気づき:学習者としての自立に向かう歩みがアイデンティティの形成につながり、共同体の自立的市民としての自覚にもつながること、の四つの要素から構成されているとする。

連携による本授業が目指すものは、留学生にとっては日本語に重きをおきながら、日本社会のメンバーとしての位置づけを自覚することであり、日本人学生にとってはこの「知恵」に気づき獲得していくことである。

##### 4.2. パフォーマティブ・ラーニングとインプロヴィゼーション

一方でこの演劇的知の習得を高尾(注7)は、パフォーマティブ・ラーニング(Performative Learning)と名付けている。これは「パフォーマンスすることで自分を崩し、そして再び作っていくこと」と定義し、学びとは「知識を詰め込むだけではなく、からだを動かして表現する、それが何かを表現し、それが周りの人に影響を与え、そのことによって当たり前になってしまっていることを批判的に考えなおして、変化を引き起こし、また新しい行動を生み出していく」こと、すなわち、「からだで行動すること、表現すること、変化すること、創造することの循環」であるとしている。この学びを実現する手法がインプロヴィゼーション(improvisation:即興)、インプロすなわち即興演劇である。「脚本も、設定も、役も何も決まっていな中で、その場に出てきたアイデアを受け容れ合い、ふくらましながら、物語をつくり、場面を演じながらシーンをつくっていく演劇である」。この考えをもとに開発されたゲームやエクササイズが多くあり、これらを取り入れながら授業を実施した(注8)。

#### 5. 2014年度前期の授業

##### 5.1. 授業の実施方法

2014年度前期には、日本人学生対象の「異文化交流から学ぶグローバル化」と留学生対象の「日本事情Ⅰ」の二つの授業を連携して同時に実施した。目標を共有し、それぞれの授業のねらいを実現するために、二人の教員が授業の企画-運営-実施-評価の授業デザイン段階で意見をすりあわせ、授業での活動を共有し、授業後は互いの目的が達成できているかの確認を常に行った。最終的な各学生への評価は他方の教員の意見を取り入れながら、それぞれの教員が別々に責任を持って行った。学生に協同を促し

ながら、教員は授業を協働で行う試みである。

## 5.2. 授業概要

### ＜授業概要＞

科目名：異文化交流から学ぶグローバル化

受講学生：学部1-2年生23名と社会人2名

到達目標：①異文化交流により、相手と自身の文化的背景を理解する。②海外の学生や留学生との交流によりコミュニケーション力をつける。③英語による活動（課内・課外）に対して、積極的に参加できる行動力を身につける。

課外活動：・授業で指定する地域のボランティア活動、イベント参加及び企画・学びラウンジ学習会・イングリッシュチャットルーム・イングリッシュサポートルーム

評価の方法：①授業毎のミニレポート・コメント②課外活動・ミニレポート③期末レポート

資料1に16回の実際の授業の流れを、日本事情I（留学生対象）の概要は資料2に記載している。また二つの授業の共通目標（便覧/シラバスの記載内容）は以下である。

「現代社会ではグローバル化が進行し、様々な価値観や文化的背景を持った人間同士の交流が必要となっています。このような異文化交流において、相手方の文化に興味を持つとともに自身の文化的背景についての理解を深めておく必要があります。この授業では、実際に異文化交流をしながら、英語（日本語）による対話力を身につけることを目指していきます。またこれらの実現のために演劇的手法を取り入れたプロジェクトワークを行い、身体的コミュニケーションと協力してプロダクトを作成していく過程も各自が確認します。受講生同士の協同学習、演劇的知を取り入れた活動から、自ら積極的に授業改革をするという自主性を育むことを目指します。」

### 5.3. 活動内容

16回の授業で、初回に全員で写真を撮り合い、四つの情報（氏名・出身地/国・所属・今ハマっているものと理由）を記入し、自己紹介書を作り全員に配布した。協同学習を進める上で顔と名前と出身地/国を知っておく必要性からである。第2・14回には、外部講師の医師による日本古来の医療方法「腱引き」を体験し、不調や痛みを通して自らの身体を捉えなおす作業を行った。

タスク活動は二つのドラマとプレゼンテーション（スピーチ発表）である。まず、準備段階にインプロの手法を取り入れ、ウォームアップ（四国学院大学の演劇教育の教員と演劇専攻

の学生が担当）を行った。その後タスク①「コミュニケーション」をテーマにしたミニドラマ（約5分）を作成上演した。これは、自分たちが日ごろしているコミュニケーションをテーマに、ミスコミュニケーションや問題を目に見える形で提示し、一緒に考えることを目指した（注9）。練習は靴を脱いで動きやすい教室（インテリジェントラボ）にて、上演は学内のけやきホール（200名収容可能な舞台付きのホール）で行い、普段の教室を離れた二つの空間を使ったドラマに取り組んだ（注10）。

タスク③は7月にサマースクールで来日した学生10名（日本語力に関してはN2レベルから未習まで）（注11）を迎えて、音楽（英語の歌）を取り入れたドラマの作成とその発表を行った。歌詞のメッセージをドラマにすなわち動きを持った見える形にすることを課題とした。

この二つの間にタスク②の「日本人への提言」作成プロジェクトを行った。これは留学生一人に対して日本人が3、4名でチームを作り、原稿の作成と発表練習をして同じく、けやきホールにて演台を使って発表するものである。留学生から意見を引き出し、自分たちの価値観とすり合わせて、留学生からの日本人への提言を作成する。発表するのは留学生だが、留学生の紹介と提言作成の過程と聞いてほしいポイント等の紹介を担当した。そして同時期に開催された徳島県外国人弁論大会への参加者とともに10名が一人約6分間のプレゼンテーションをし、それぞれに対して内容と方法に関してのコメントを作成、翌週には発表者に各自の得たコメントをコピーして配布した（注12）。

表2 授業の流れ 2014年度前期

- 1) 自己紹介書の作成と配布
- 2) 身体と医療について考える：  
医師による「腱引き」講義と実演
- 3) タスク① ミニドラマ作成と上演  
テーマ「コミュニケーション」  
タスク②「日本人への提言」作成と発表会  
タスク③ ミニドラマ作成と上演  
テーマ「音楽を使った劇」
- 4) 課外活動：  
とくしまマルシェ「世界のじゃがいも展」参加

三つのタスクに共通しているのは、活動のパフォーマンスとしての最終目的、期間、メンバーが提示されているだけで、あとはグループで解決することを促した。二人の教員は適宜アドバイスをを行った。

#### 5.4. 評価①<日本人学生が学んだこと-学生レポートから>

本授業（日本人学生用）のブログにアップされたミニレポートの記述から授業を概観する。

<4月>：初回の授業で留学生 10 名と日本語教師と一緒に、グループに分かれて自己紹介を行った。高校時代にホームステイ体験のあった一人の学生をのぞいて、ほぼ全員が、「こんなにたくさんの外国人を見て、しかも話をすることが初めてだった」と記述していた。自己紹介に入れるとした前述の四つ（名前・出身地・所属・ハマっているもの）を言い終わると「もう話すことはなくなってしまうという自分が情けなかった」という記述も数名あった。入学したばかりの学生にとって、大変な緊張が強いられたようである。これらが示すとおり、5月末までの、日本人学生の表情は固く、グループ内での反応は鈍く感じられた。資料1表の5回までは活動が盛り上がり導入の段階が続き、教員自身も最終課題ができるのかどうか、不安になったこともあった。しかし毎回出されるミニレポートには、「堂々と意見を語る留学生に驚いた」「なんとか自分もがんばりたい」、頭では「自分が積極的に考えたことを話さないことには始まらないが動けない」という苦悩も書かれていた。

<5月>：特に四国学院大学演劇専攻の学生二人によるインプロゲーム後の記述で、「一人が間違えると全員で笑いながら『あー間違っちゃった！』と大きく身体を動かして言う体験後、間違えてはいけない、正解をださなければならぬという縛りがとれていくのを感じた」また「このクラスは慣れるのに時間がかかった」

身体を使い、他者と合わせてみながら、どのように適応すればよいのか模索していることがうかがえた。

<6月>：クラスのメンバーの顔も覚えられて、「苦痛だったこの授業が楽しみなになってきた」という記述が見られるようになったのもこの時期である。

<7月>：毎週の課題発表の準備に追われながら、授業以外に集まって、ドラマとスピーチ（留学生のサポーターとして）の準備が忙しいが「やりがいがある」こと、休んだ人へのフォローから「出席しないとみんなが困る」という連帯責任の気持ちも生まれたことがわかる。

授業の中での様々な気づきも、そういう見方もあるのかといったより客観的な書き方に変わっていることも挙げられる。

最後の2ヶ月で少しずつ前向きな活動がなされたようである。

#### 5.5. 評価②<日本人学生が学んだこと-最終レポート「この授業で学んだこと」から>

最終レポート（21名）の記述を簡単にし、次の5つの項目にまとめた。

##### ① 異文化理解

- ・提言の内容で外国人から日本人がどのように見られているのかを知った。
- ・国でなく目の前の個人を大切にしたい関わりを留学生が望んでいることを知った。
- ・メディアから得た情報によるステレオタイプや偏見を実際の目の前にいる人から確認できた。
- ・異文化に対する興味がわいた。  
⇒自分もぜひ留学してみたいと考えた。
- ・宗教の違い、言語の違い、食習慣の違いを否定でなく、認める。
- ・これまでは外国人は自分と違うと頭で区別していたが、日本人と同じような感覚で外国人を見るようになった。
- ・異文化を愛し、異国の地を愛するようになりたい。「尊重」を忘れてはならない。
- ・異文化は特にあるのではなく、すぐそばの手のとどくところにある。

##### ② 言語

- ・日常会話レベルから英語の本格的な勉強を始めようと考えた。
- ・ふだん何気なく使っている日本語を簡単な言葉で伝えられる能力がいる。
- ・日本文化が外国語で説明できることが自分に必要なこと。

##### ③ 人との関わり方

- ・キャンパスで声を掛け合える留学生と日本人の友達ができた。
- ・留学生は最初からそして自分から私たちに寄り添ってきてくれた。

##### ④ 学び方・取り組み方

- ・提言作成で、留学生の考えを引き出し、作成から発表まで支援し、達成観を味わった。
- ・意見を出し合うことで、周りの人がそれに反応し、面白いアイデアに変わっていく可能性がある。
- ・失敗することに恐れなくなったように感じる。
- ・客観的に自分の行動を見ることができるようになった。
- ・知識を増やすだけでなく、よりよいものを発見するために勉強している。
- ・演劇を通して、動揺せずにアドリブで対応できる力がついた。
- ・最初は授業のやり方に違和感があったが、今はそうではない、違和感は相手を受け入

れることができたときに取りはらえた。

- ・自分一人では見えないものを見て、自分では見ることで見えない見方を知ることができた。

### ⑤ コミュニケーション

- ・ことばが少なくても、コミュニケーションの方法がいくつもあって、それらが使い分けられる。
- ・ジェスチャーや身体的コミュニケーションを活用する。
- ・ことばが通じなくても仲良くなれる。
- ・難しいことを言おうとするより、伝わるシンプルさが大切なこと。
- ・人に内容をわかりやすく伝えようとするときが一番、互いに理解が進む。

また次のような「積極的に自分から動かないと何も始まらない、最初の頃は自分から何も話せなかったが、今は行動できるようになったと思う。先生から積極的になれ！と注意されたことが懐かしい。自分の意見をしっかりと伝える能力と相手の意見をよく聞き理解しようとする姿勢を感じる。日本の我慢の文化（感じたことをそのまま言わずに一旦考える、場の雰囲気壊さないように自分の感情を閉じ込める）だけでは通用しない」というものもあった。

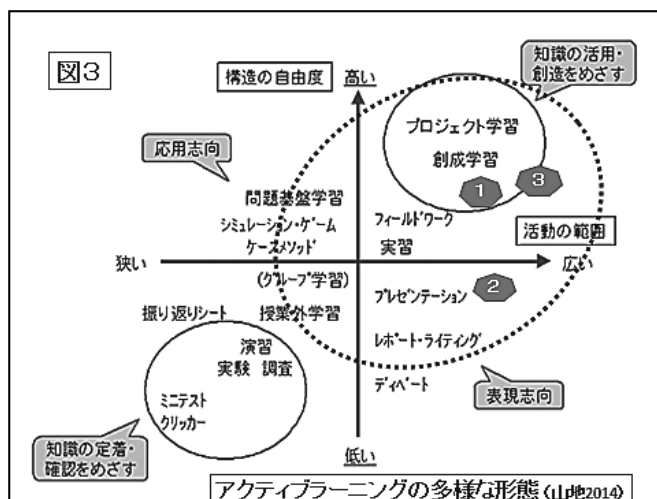
以上が8月の自己評価としての気づきと学びの記述である。

## 6. これからの学び

### 6.1. アクティブラーニングの中での位置づけ

「思考を活性化する」学習形態としてのアクティブラーニングにおいて、パフォーマンス・ラーニングを目指す今回の取り組みはどのように位置づけられるのだろうか。長崎大学で教員が自らの教育活動にアクティブラーニングを取り入れることを推進する山地（注13）は、講義形式（一方的な知識の伝達を目的とする）ではない学習形態を図3のように図式化している。アクティブラーニングと呼ばれる多様な形態を構造の自由度の高低、活動の範囲の広狭で四つの象限にわけている。

今回の三つのタスクは、①「コミュニケーション」をテーマにしたミニドラマ、②留学生のスピーチ作成と発表の支援、さらに③グループで好きな音楽「歌」を盛り込んだドラマであった。いずれも最終プロダクトと時間制限と、発表方法のみが教師から与えられていてあとは自由であった。ゆえに、ドラマ作成のタスク①、③は第2象限に、スピーチは第4象限に位置づけられるだろう。これらは協同で取り組んだこと



から、各グループによっても取り組み方や目標設定が違い、また内容が高度な「知識の活用・創造をめざす」ものもあったため、広く範囲を定めて点線の楕円の中のどこかに位置づけられるとした。

また山地は、専門に移る前の教養教育で第3,4象限にあるような「思考を活性化する」学習形態を体験することの重要性を説いている。山地はこえ、ことば、身体といった要素を使った学習についてはここでは述べていないが、これらに焦点を当てた学習形態もやはり教養教育に必要といえるだろう。

### 6.2. パフォーマンス・ラーニングへ

演劇的要素を取り入れた教育活動の目的は、上手な作品を作ることではない。慣れ親しんだ価値観や思考パターンを一度手放すことを体感することである。それゆえ、導入こそ演劇の指導者の手を借りることも必要であるが、実際には、参加者が自らの過去の知見をもとに、協力してドラマを作ることに他ならないと考える。プロダクトを全員で見て聞いて感じて共有したときに、メッセージがわからない、わかりにくい、わかったそして何かしらの感情をいだいたという感覚を大切にすることだろう。シスター教育のように出来不出来を評価することもあまり必要ないと考える。

筆者のこれまでの学習経験から、アサーティブネス/アサーション（注14）の講座では、知識として講義形式で学んだあとにロールプレイを通してその学びを確実なものとする。すなわち、自分自身がアサーティブになる必要性を感じる場面を自分自身でとらえ、その場面をファシリテーターや受講するメンバーに相手役になってもらい、自分自身をもう一度演じるというトレーニングを行う。頭でこうありたいと考える自分と実際に行動する自分とのギャッ

ブを縮めて一つにしていくという行動療法の考え方である。講座の空間は実験室（ラボラトリー）であり、現実の場面では失敗をこわがるあまりできないことを、安心して試みる方法ともいえる。何度もロールプレイを繰り返す中で、自分の問題を明らかにする自己開示に始まり、言いたいことは何だったのか、本当の自分の気持ちは何だったのかを確認していく。また自分の声と身体を感じながら、自分との対話をする場となっている。そして、他者から自分がどのように見えているのかのフィードバックをもらい勇気づけられ、アサーティブな人との関わり方、発言そして行動を獲得する。このロールプレイの活動もパフォーマンス・ラーニングといえよう。

また実際の成人の教育活動として、徳島県職員対象の「国際化講座」において、「私が考える（徳島県の）国際化」をドラマにすることを筆者の三隅は課題としている（注 15）。これは、心理劇の中の「個人ではなく社会の問題を即興的に演じさせ相互の対応の仕方を学び、問題解決の手がかりをつかむ」というソシオドラマである。研修の中で、まず初級及び上級の留学生との交流を体験し、そして異文化理解に対する講義と食文化体験のあとで、参加者が5、6人のグループになって相談し、最後にドラマを上演する。従来ならば模造紙やホワイトボードを使ってメンバーの一人がグループで出された意見をまとめて発表するというのが一般的であろう。参加者は「演劇などできない！」と困惑を示すが、これまでの人生経験そして様々な知識を出し合っただけで全員が何かしらの役割を担い、身体を使って発表するということを見事に遂行する。上演後の感想はおしなべて、やれる自分を知ったことや、自他共におもしろいものができたことや、非常に印象に残ったことが挙げられている。

こういった教育、学習活動から今一度「演じる」ということの必要性を考えたい。我々は、普段から生活の中で一人の人間としても様々な役割を演じている。そして所属する社会の中でこのように振舞うべきであるという確固なイメージがこれまで生きていく中で与えられてきているのも事実である。大学の教養教育課程で学ぶ学生らにとっても、これまでの学びの経験とは違った、アクティブラーニングやパフォーマンス・ラーニングを学習や教育の目的に応じて取り入れていくことが大切だろう。

それは、次に始まる専門教育や社会に出て生きていくためのジェネリックスキル（汎用的技能）を習得するための基本的な構えともなると

考えるからである。

決して上手な演劇を作ることが目的でなく、今の自分と周りの他者が、自らの身体を使って一緒に協力してドラマを作り上げる体験を重視したい。それゆえ、教師がドラマの出来具合に関して優劣を説いたり評価したりするものでなく、学生自身の評価が見えるような工夫と開発が必要であろう。

## 7. まとめと今後の課題

以上のように、教養教育にパフォーマンス・ラーニングを取り入れる経緯を述べてきた。

留学生の日本語教育の視点から、初年次の日本人学生に対する教育への可能性を考えた次第である。これからの課題として、一つには前述の学生と教師が互いに分かる評価の方法を考えること、これは成績評価とは別の関わるものすべてが行う評価である。二つ目は実施する際の教師の関わり方である。今回の取り組みでは教える以外の、ファシリテーターとしてあるいはカウンセラーやコンサルタントとしての働きかけが十分できていたとは言えない。学生らが戸惑っているときに適切なタイミングと方法で、たとえば個々に声をかけたり、寄り添ったりすることができていたかを改めて問い直す必要がある。さらに、演劇教育ではない「演じることを取り入れた教育」を実践するために、教師が体験的に回数を重ねて学ぶことも必要だろう。

教養教育を通して筆者らが目指すものは授業概要で述べたように、様々な価値観を持った人間同士の交流から、これからの多文化共生社会を実現していく力をつけることにほかならない。本研究は、さらなる実践を通して継続していきたいと考える。

## 注

注1. 大橋眞、Gehertz 三隅友子「交流と対話を通じた学内の連携を考える-『異文化交流の体験から何を学ぶのか』と『日本事情IV』の連携-」（2012）P. 31-45 徳島大学国際センター紀要 2012

注2. 日本語能力試験の詳細は、実施組織のホームページを参照のこと [www.jlpt.jp/](http://www.jlpt.jp/)。N1-N3 レベルは、言語知識、読解、聴解の科目をマークシート方式で回答するため発話や会話の能力を調べる試験ではない。ゆえに N1 取得者が必ず日本語



での十分な意思疎通ができるものでもない。

- 注3. 2014年度前期日本事情Ⅰの受講者は、学部留学生4名、交換留学生4名、研究生2名の計10名である。
- 注4. Gehrtz 三隅友子、保坂敏子「映像作品を利用した構成主義に基づく授業デザイン」(2013) P.1-9 徳島大学国際センター紀要
- 注5. 「地域と作る演劇と日本教育2014-プロジェクトワークの視点から-」(2015) Gehrtz 三隅友子『第18回ヨーロッパ日本語教師学会大会報告書』印刷中
- 注6. 参考文献、渡部(2001)～(2014)参照のこと
- 注7. 高尾隆、中原淳著『インプロする組織-予定調和を超え、日常をゆさぶる-』(2012)三省堂
- 注8. 2013年より、FD推進プログラム大学教育カンファレンス in 徳島にて「教育にインプロをとりいれよう」筆者の三隅と四国学院大学の仙石がワークショップを実施した。  
<http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/fd/article/0000882.html> の2014年の発表抄録を参照されたい。
- 注9. 2014年春の獲得型教育研究会で実際にタスクとして出された「コミュニケーション」のテーマである。参加者が2時間で作成し5分間上演したアイデアをそのまま授業で取り入れて実施した。筆者の三隅が体験し、関わる人がどのようにコミュニケーションを考えているかがよくわかることから選んだ。  
また、音楽劇に関しては大橋が日本語能力の低い留学生と、英語を学ぶ必要のある日本人学生の両方の学習効果を考えて、英語の歌を使うことを進めて提案した活動である。
- 注10. 作成したドラマは次の四つである。①「転校生は宇宙人」②「鬼ごっこ」③「レストランで」④「学園物語」いずれも問題が起これそれを克服する内容のものであった。
- 注11. 7月14日から8月12日まで実施された総合科学部サマースクールでモンゴル3名・韓国3名・中国2名・アメリカ2名

の10名が来日、授業に参加しタスク活動③を行った。

- 注12. 提言のタイトル(発表者の国)は以下である。・「日本の文化について」(中国)・「外国人への接し方」(アイルランド)・「同じ?違う!」(中国)・「固定観念を捨ててください?」(中国)・「ビーガンの日本での生活」(スウェーデン)・「日の昇る国日本」(ウガンダ)・「日本で感じたこと」(中国)・「日本で生活をして」(マレーシア)・「日本はもっと強くなれる!」(エジプト)
- 注13. 山地弘起「アクティブラーニングの実質化に向けて」長崎大学 大学教育機能開発センターH.Pより  
[http://www.redc.nagasaki-u.ac.jp/teacher/files/Int\\_yamaji.pdf](http://www.redc.nagasaki-u.ac.jp/teacher/files/Int_yamaji.pdf)
- 注14. アサーティブネス/アサーションは自分と相手を大切にしたい人間関係を保ちながら、自己主張していくというコミュニケーションの方法である。
- 注15. 2011年よりドラマを最終課題として実施している。留学生や県の国際交流員がグループに入って作成したこともある。2014年11月は①少しの勇気で国際貢献②おへんろにて③異文化理解-桃太郎ベースで-④祖谷の民宿にて、の四つが発表された。

## 参考文献

- 小林由利子他(2010)「ドラマ教育入門」  
図書文化
- 佐々木倫子(2013)「社会的変動と日本語教育の40年間」Janetスリーエーネットワーク社64号
- 斎藤孝(2000)「身体感覚を取り戻す-腰・ハラ文化の再生-」NHKブックス
- 竹内敏晴(1989)「からだ・演劇・教育」  
岩波新書67
- 竹内敏晴(1990)「からだとことばのレッスン」講談社現代新書1027
- 成田秀夫(2012)「学びと仕事をつなぐ、8つの日本語スキル」丸善プラネット
- 平田オリザ(2004)「演技と演出」  
講談社現代新書1723
- 平田オリザ・北川達夫(2008)「ニッポンには対話がない-学びとコミュニケーションの再生」三省堂

三森ゆりか「外国語を身につけるための日本語レッスン」(2003) 白水社  
山地弘起他編著「学生の納得感を高める大学授業」(2012) ナカニシヤ出版  
渡部淳 (2001) 「教育における演劇知」  
柏書房  
渡部淳 (2007) 「大学生のための知のスキル・表現のスキル」 旬報社  
渡部淳 (2014) 「教育におけるドラマ技法の探究」 明石書店

付記：

本研究は、H23-26 科学研究費補助金基盤(C)一般、研究課題『大学におけるコミュニケーション教育の総合的カリキュラムの開発とFDへの展開』（課題番号：2350111101 代表：山地弘起）の成果の一部である。

資料 1

異文化交流から学ぶグローバル化＋日本事情 I  
2014 年度前期

回	月日	テーマ	内容	方法
＜導入＞				
1	4/16	授業ガイダンス	自己紹介・インプロ (留学生・日本人学生・社会人)	インプロ① 全員 GW
2	4/23	身体について考える①	医師による「腱引き」講義と実演	GW 日本人が留学生に説明
3	4/30	異文化理解とは？	ドイツの子供向け DVD を見て、結末を 考える	GW グループ毎に発表
4	5/14	グローバル化について	グローバル化を進めるためのアイデア を考えて共有する	GW ワールドカフェ方式
5	5/21	身体的コミュニケーション	演劇専攻の学生によるインプロ (拍手回し・ホプラ・絵しりとり等)	インプロ②
＜協同学習・演劇的手法を使った活動＞				
6	5/28	ドラマ作り①	インプロから演劇へ(1枚の紙・四季等) ドラマ「コミュニケーション」の作成	GW 4チーム
7	6/4	「日本人への提言」作成① +じゃがいもについて①	留学生のスピーチ作成プロジェクト 留学生へのインタビュー	GW：留学生1名と日本人 学生数名でチーム作成
8	6/11	ドラマ作り②	テーマ「コミュニケーション」 シナリオ作成と練習	GW
9	6/18	「日本人への提言」作成② +世界のじゃがいも	「日本人への提言」作成と ジャガイモの試食(ベジハッピー提供)	GW
10	6/25	ドラマ発表③	けやきホールにて 4チームの発表 学生による録画	GW
	6/29	課外活動 とくしまマルシェ参加	世界のじゃがいも 販売 ボランティア	8名参加
11	7/2	「日本人への提言」作成③ +初級留学生発表	提言練習・初級留学生の「国町紹介」を 聞く	GW
12	7/9	「日本人への提言」発表会	けやきホールにて、留学生を紹介し、10 名の発表を聞いてコメントを書く	
13	7/16	サマププログラム参加留学生と 音楽劇の作成①	音楽を使った演劇作成 ☆留学生にコメントシートを配布	GW 日本語初級学生の参加
14	7/23	身体について考える	医師による「腱引き」講義と実演	GW 初級学生に説明
		ユニバーサルデザイン事業	美術館・博物館訪問	日本事情受講者別活動
15	7/30	音楽劇の作成②	音楽を使った演劇作成	GW
16	8/6	音楽劇の発表会	けやきホールにて 発表会 録画	GW

## 資料 2

授業科目：日本事情 I

対象学生：学部留学生 4 と交換留学生 4 と研究生 2 10 名  
(学部及び交換留学生は日本語能力試験 2 級以上)

到達目標：①交流により、他者と自己の文化的背景を理解する  
②日本人学生や社会人との交流によりコミュニケーション力をつける  
③日本語による活動に対して、積極的に参加できる行動力を身につける  
さらに交換留学生（1 年）に対しては、これまで自国で学んだ日本語をより実践的に使える力とする。学部学生と研究生に対しては、多様な人との関わりをとおして大学生活を支える日本語力をつける

授業の目的：留学生が大学生活を送る上で必要な日本文化の知識の獲得と日本語力の向上を目指します。日本事情という科目名が表すように、日本語そのものの学習をするのではなく、日本文化や習慣に焦点を当てた実際の活動（タスク）を日本人と行う中で、今の自分に足りない日本語力や知識に気づき、それを補充していくことを繰り返します。これからの留学生活を支える自律的な日本語を学ぶストラテジーをつかむことと、留学生として、日本（徳島）で学ぶ意義を明確することを目的としています。

キーワード：異文化交流、多文化共生、対話力、演劇的知、地域社会

授業外の活動：<とくしま異文化キャラバン隊>の活動  
文部科学省委託事業 徳島大学留学生交流拠点整備事業  
「異文化キャラバン隊による国際化と新たな地域の創成」

学習評価の方法 ①出席 60%  
②「日本人への提言」レポート作成と発表 20%  
③「ミニドラマ」作成と発表 20%